

研究会	日中両雄は並びたつか：国際構造・国内政治・相互認識 Power Shift, Paradigm Shift: Sino-Japanese Relations in the post-Cold War World
日時	2008年10月17日（金）－18日（土）
場所	早稲田大学 19号館 309室
参加者	天児慧（早稲田大学）、Mike Mochizuki (George Washington University) 添谷芳秀（慶應義塾大学）、上久保誠人（早稲田大学）、植木千可子（早稲田大学）、園田茂人（早稲田大学）、張望（早稲田大学）、徐顕芬（早稲田大学）、劉傑（早稲田大学）、青山瑠妙（早稲田大学）、Gui Yongtao(Beijing University)、倉田徹（金沢大学）、王雪萍(関西学院大学)、楊志輝（恵泉女学園大学）、Christian Wirth (Waseda University)、Lin Yifu (Waseda University)、Kolodziejczyk Aleksandra Maria (Waseda University)、Takeshi Uemura (Waseda University)

概要：

本ワークショップは、冷戦後の複雑な日中関係の実態を解明することを目的とする。リサーチクエスチョンとしては基本的に三つと設定している。1) なぜ冷戦後の日中間の摩擦がさまざまな分野で多発してしまったのか？ 2) なぜ日中両国は政治関係での摩擦があるにもかかわらず、経済および社会分野での交流は強化されているのか？ 3) 日中両国は近代史百六十年間で初めて大国として並び立つことができるのだろうか？この問題の答えを見出すため、17名の研究者は、それぞれに国際構造(International Structure)、国内政治(Domestic Politics)と相互認識(Mutual Image)のセッションで発表し、活発の議論を行われました。特に、最後のセッションは、博士課程在籍の4人の大学院生は、自身の研究を積極的に発表し、慶應義塾大学の添谷芳秀先生の貴重なコメントをいただきました。

出版計画として、本ワークショップの開催は第一歩である。今回のイベントを通して、いくつかの問題点を整理しました：

- 1) 実証の部分に関して、今回のワークショップで行われた研究発表は、冷戦後の日中関係における中国側の政策決定要因および過程に関する研究はまた十分とは言えない（天児先生、Mike Mochizuki 先生の総括コメント）。また、日本政治・日本外交の領域において、冷戦後の日本の対中外交の全体像（特に小泉時代の対中外交の性格）に関する実証的・理論的な研究はまた十分重視されてない（天児先生）。
- 2) 理論の面について、今回のワークショップで行われた一部の発表は国際関係理論を応用

し、日中関係における研究問題を理論的に説明しましたが、「理論構築」・「理論修正」への貢献はまた見えてこない (Mike Mochizuki 先生)。

今後のスケジュールとして、4点を提言する：

- 1) 可能な限り、各セッションの参加者は定期的に勉強会・研究会を開き、活発に意見交換。
- 2) 冷戦後の中国対日外交の実証研究も取り入れる。
- 3) 今回の研究者ネットワークを活用するため、特定のホームページを作り、この領域の研究情報の共有を目指す。
- 4) 今後の出版計画の方針に関して、研究成果を世界に発信するため、まず英語版の案を先行する。暫定の案として、2009年9月30日まで各参加者の英語の原稿提出を要請。